



探偵



芳田尚哉

今回の連続殺人事件の謎は全て解けました。

これから、ひとつずつ説明していきましょう。

まず最初の事件ですが、足跡がない場所の中央にあった死体。言ってしまえば拓けた密室ですが、あれは意外に簡単でした。

バルコニーの手すりに、なにかが擦れた跡がありましたからね。そして、反対側にも同じものがありました。

もうおわかりですね。

簡単なトリックだったのです。

両側のバルコニーにワイヤーを渡して、死体を吊り下げて移動させたんです。真ん中に来たところで、ワイヤーを切断するなどして、あの場所に落としたんでしょう。

あの場所なら、ほとんど人は来ませんから、ワイヤーが見つかるというリスクも少ないですからね。そもそも、上を見るような事がない限り、わかるようなものじゃないでしょうから。

このトリックならば、基本的に誰にでもできます。

そして次の事件です。あの女湯で発見された第二の被害者ですが、第一発見者以外は全員アリバイがあるというものでしたが、残念ながらこれもまた誰にでもできるものでした。つまり、この事件において、アリバイなど無意味なのです。それをこれから説明していきましょう。

男女別の浴場ですが、そこがミソです。常連が少ない今日だからこそ、成立するトリックではありませんでしたけど。なにせ、常連ならばすぐに気付くようなものでしたから。

その条件に加え、さらには男女比が抜群でした。

女湯はほとんど利用がなかった。だからこそです。

常連がいなかったわけですから、浴室が逆になっていてもバレないわけです。

これも簡単な事だったんですよ。

普通、入浴した直後にもう一度入浴する事はないですよ。ですから犯人は、女性客が利用したのを確認して、暖簾を入れ替えたんです。そうしてから、被害者を呼びだした。被害者はこうして本来は女湯である方に入ったんです。

それを確認して、犯人は暖簾を戻すと、用心のために清掃中の札を立てておいた。

そういう状況を作って犯行に及んだわけです。

あとは朝風呂に来た誰かが見つけるなり、清掃に来た従業員が見つけるのを待てばいい。

女性客か従業員しか犯行に及べないというのが盲点なのです。女湯で男が犯行を犯すはずがないという、心理的な密室を作り上げてしまったわけです。しかし、これも密室ではなかった。

これで誰でも可能という事です。

単純なトリックほど、意外とバレにくいものなのかもしれませんね。

どうしても、不可能に思えそうなものには、あれこれと難しく考えてしまう。

別に犯人はプロじゃない。手の込んだトリックを考えられるなら、それこそ推理作家になればいい。もちろん文才は必要でしょうけど。

結局のところ犯人は素人なんです。素人なんですから、こちらはその視点で考えるべきなんです。手の込んだトリックは、所詮は物語の中だけです。現実にあんな事をするはずがありません。もっと短絡的なもののはずなのです。

おっと、話が微妙にそれましたね。

とりあえずここまではこれでいいでしょうか。

そして最難関の密室とでもいうべき第三の事件。これは少し悩みました。わかりやすいほどに完璧な密室だったのです。これぞ密室というものでした。

なにしろドアはもちろん、全ての窓が施錠されていました。しかも鍵は部屋の中。スペアキーはないので、外から施錠する事は不可能。鍵を隙間から入れる事も不可能。まさにこれぞ密室というものでした。

だからこそ、真相がわかった時は、自分でも驚きました。意外や意外のものだったわけですから。

部屋の真ん中で事切れていた被害者。

密室は被害者が自ら鍵をかけた。

それしか考えられないのです。

即死ではなく、事切れるまでわずかながら時間があつたのでしょうか。被害者はその間に、犯人が戻ってこないように鍵をかけたのです。

助けを呼ばず、どうしてそんな事をしたのかとお思いでしょうが、人間というものはいざという時ほど、冷静に考えた時とは逆の行動をとってしまうものなのです。

ダイイングメッセージを残す。犯人の名前を記す。そういう事すら考えられなかったわけです。とにかく犯人が来ないようにしたわけです。

ここで誰かを呼べば事件は終わっていたはずですね。

そうしなかった事で、事件は続いてしまった。そして、この事件を連続密室殺人事件にしてしまったわけです。

このトリックともいえないような、偶然の密室に気付いた時は鳥肌ものでした。

さて、ここまでは誰にでも犯行に及べる内容でした。

しかし第四の事件、これが決定的でした。これで犯人が決定的なものになりました。

なにしろ犯人しか知るはずもない事を口走っていたのです。

まずは状況を整理しましょう。

第四の被害者は、遺書を書き記して自害していた。もっとも、それは犯人がそう見せかけただけですが。

服毒自殺というシチュエーションでした。遺書の内容も問題なさそうなものでした。

これが本当に、罪を悔いてのものでしたら、それはそれで解決していたのかもしれませんが。

だが、これは偽りです。

真犯人によって殺害されたと断言できます。あのままでしたら、自害で納得されそうだったものを、犯人は迂闊な事を述べています。犯人しか知り得ない事です。

事件の仕上げという事もあり、そして完遂したという事もあり油断したのでしょうか。もしくは

、全員に納得させようとしたのでしょう。気持ちはわかります。だからこそ、余計な事まで言ってしまった。

言わなければ……というのですが、その事で犯人を確信させた。

つまり、この事件の犯

—————E N D—————

「ここで終わっています」

警部補はメール画面を警部に見せた。確かに文章はそこで終わっている。

「どういう事なんだ、これは」

「おそらく、文字数オーバーだったのかと。もしくはここで送信してしまったか。どちらかかと思えます」

「なんだと！　すぐに連絡をとれ」

「それがですね……。何度も電話をかけているのですが、電源が入っていないか電波の届かない場所というアナウンスなんですよ」

警部補はどうしようもないと告げる。

「くっそ。あの役立たず探偵め。どうしていつも、詰めが甘いんだ」

警部は怒りのあまり、警部補の携帯電話を奪って地面に投げつけようとしたが、警部補がなんとか自分の携帯電話を死守した。

「刑事さん、犯人は誰なんですか？　っていうか、そろそろ解放してもらえませんか」

広間に集められた関係者から声が挙がる。

「事件はまだ解決してないんだ。ちくしょう。なんとしてもすぐ、あの役立たずに連絡をとれ」

F i n o .

探偵

<http://p.booklog.jp/book/110249>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110249>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト